

令和7年度 箕面市議会行政視察報告書

(建設水道常任委員会)

1 日程

令和8年2月5日(木)～ 2月6日(金)

2 視察先

(1) 愛知県田原市

視察項目	農業施策について
視察目的	田原市の農業施策について理解を深め、本市の今後の農業施策のあるべき姿を再考する一助とする

(2) 愛知県豊橋市

視察項目	アグリミートアップについて
視察目的	豊橋市が実施する「TOYOHASHI AGRI MEETUP」によるスタートアップ企業と農業者のマッチング及びスマート農業技術の実証支援の取組を学び、本市における農業課題解決や新たな農業施策の検討に資することを目的とする。

3 参加者

委員	武智秀生委員長、木下伸雄副委員長、村川真実委員、尾崎夏樹委員、牧馨委員
----	-------------------------------------

(1) 愛知県田原市

項目	内容	備考
愛知県田原市について	<ul style="list-style-type: none"> ・人口 58,004 人、世帯数 23,978 世帯（令和 7 年 10 月末時点） ・行政面積：191.11 km² ・日本有数の農業地域で農業産出額 891 億円（全国 2 位）。 ・第 1 次産業従事者は 9983 人で全産業別就業人口の 29%。 ・全国有数の日照量があり、降水量は都市部より多いが、地形条件により水資源は不足。 	説明 田原市議会議長 総務産業委員長 農林水産部次長 営農支援課長
近年の営農状況	<ul style="list-style-type: none"> ・1次産業は家族経営が大部分を占め、主業経営体が全体の 68%。 ・農家数は減少しているものの、機械化・集荷施設の近代化で経営規模は拡大。 ・農業従事者の年齢構成は、全国平均と比べて若手の割合が多い。 ・新規就農者は年平均 36 人。令和 3 年から増加傾向。 ・花き；全国 1 位、野菜；全国 2 位、畜産；全国 19 位 	同上
近年の農業飛躍の要因	<ul style="list-style-type: none"> ・全国有数の日照量、温暖な気候 ・豊川用水による安定的な農業用水の確保 ・農業構造改善事業による農業生産基盤の整備（昭和 36 年～） ・スマート技術を活用した省力化・高品質化（ロボットや ICT） ・高速道路による大消費地への輸送網の構築 ・高収益農業の人材の存在 	同上
農業の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・担い手の育成、農業経営体の確保 ・生産基盤の強化、先進技術の導入、低コスト化の推進 ・産地の知名度向上、海外市場への販路開拓 ・持続可能な環境保全型農業の推進、農地の集約化 	同上
スマート農業の取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・令和 4 年度から市単独で AI、IOT、ICT やロボット技術を活用したスマート農業機器の導入を支援している。 ・成果：作業の大幅な時間短縮が可能になった・省力化により作業の負担が軽減された。 	同上
新規就農者の確保について	<ul style="list-style-type: none"> ・新たに農業を始める人を対象とした情報発信 ・新規就農に係る補助金支給の整備 ・新規就農希望者に対する研修受入体制の整備 ・農地・園芸施設バンク等を活用した農地の斡旋 	同上
「未来の農地マップ」について	<ul style="list-style-type: none"> ・貸し出されたり売り出されたりしている農地の情報をウェブの地図に表示し、農地集積・集約化などを支援する仕組みを導入。 ・2026 年 2 月 3 日にニュースリリース（愛知県内では初のシステム） 	同上



所感

- ・大規模に農業施策を展開する田原市の取り組みは、本市とは前提こそ異なるものの、“農業の持続性をどう確保するか”という点で有用な示唆が得られた。
- ・とりわけ担い手確保や環境と共生する考え方・姿勢は、規模を問わず応用可能な視点だと感じた。
- ・今回の学びを踏まえ、本市でも地域の特性に合わせた形で箕面らしい農業の未来を着実に形にしていきたいと考える。

(2) 愛知県豊橋市

項目	内容	備考
愛知県豊橋市について	<ul style="list-style-type: none"> ・人口：約 37 万人 ・面積：262.05 km² ・東三河地域の中核都市 ・施設園芸を中心に全国有数の農業産出額を誇る農業都市 	説明者 産業部地域イノベーション推進室
近年の営農状況	<ul style="list-style-type: none"> ・温暖な気候と豊川用水の豊かな水を活かした、全国トップクラスの農業産出額を誇る、極めて盛んな農業地帯（令和5年市町村別農業産出額：全国15位、421億円） ・高齢化・後継者不足による離農や耕作放棄地の増加といった課題を抱えつつも、「農業の大規模化・効率化」と「スマート農業（アグリテック）の推進」により、生産性の向上を目指す先進的な動きが活発 ・多品目の生産地：野菜（トマト、キャベツ、レタス、ブロッコリー）、果樹（みかん、かき、ぶどう）、花き（菊、バラ、観葉植物）、畜産（うずら、肉用牛、豚、鶏卵）など、多彩な産地である。 ・施設園芸の先進地：1戸あたりの農業産出額が増加傾向にあり、大規模な施設栽培が強み。 ・産出額の推移：田原市と並び、県全体の農業産出額の大部分を占めており、安定した産地としての地位を築いている。 	
農業の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・担い手不足と高齢化：農家戸数や経営耕地面積は減少傾向にあるため、経営の大規模化、法人化などによる効率化と耕作地の集約化が必要 ・鳥獣被害の深刻化：イノシシやサルによる農作物被害が平野部でも見られ、営農意欲の減退や所得への影響が懸念されている。 ・環境への配慮：「みどりの食料システム戦略」に基づき、環境負荷軽減と持続的発展を両立させる農業への転換（スマート技術活用など）をめざす。 ・豊橋市の農業は全国的に見てもトップクラスの産出額を維持している「攻めの農業」の現場であり、最新技術を取り入れながら、人手不足の解消と持続可能な営農体制の構築が課題 	

<p>豊橋アグリミートアップ事業について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・スマート農業、アグリテックの導入：センサや制御機器を活用した「植物工場」の技術普及や、農業者とスタートアップ企業をマッチングする「TOYOHASHI AGRIMEETUP」など、革新的な技術導入が積極的に行われている。 ・新たな施設栽培：日本初となった国産品種の大玉トマトの周年安定栽培など、高品質・高収量な農業技術が実践されている。 ・道の駅「とよはし」の活用：2019年に開駅し、食と農業の魅力を発信する拠点として、地産地消や直売の拡大に貢献している。 	
--------------------------	---	--



<p>所感</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業者・就農希望者・支援機関をつなぐ場づくりの重要性を再認識した。 ・農業が一大産業である豊橋市と本市の農業における規模が簡単に比較できるものではないが、箕面市の農業経営にも取り入れられるヒントが得られたことは大きな収穫だった。 ・成果の検証するための項目に関しても、数字はあるがそこが最重要ではないと言われていたことが印象深かった。
--